# 学生たちと島内を東に西に「中ぶらマップ」は完成するか

ドームの真下にある豪華な旧・貴賓室。見学ツアーで体験できる。（提供元：日本銀行大阪支店）

夏までの半年間、私は「新おおさかKEYわーど」第36回で紹介した大阪大学中之島芸術センターでの特色ある授業を依頼され、土佐堀川と堂島川に挟まれた中之島の文化施設を調べる演習を開講した。

美術館やホールが集まり、“アートアイランド”とも呼ばれる中之島である。大阪市中央公会堂の建築や天井画、大阪朝日会館でのコンサートや展覧会、朝日ビルディングの中之島洋画研究所など、学生諸君が調べて面白いテーマは多い。同じ都心の川でも東京の隅田川界隈と中之島で開花した文化芸術の違いをさぐったり、モダニズム文化における女性の躍進と中之島の文化施設との関係など、発想を広げることもできるだろう。

現地にある教室を拠点に開講する地の利を生かして、中之島の近代建築や記念碑、顕彰碑の調査もおこない、阪大のセンターを中心に、アートに特化して中之島を散策するための文化芸術地図の作製をレポートに課した。

受講生は大学院生三人と少なかった分、機動性が効き、見学会は、ある日はリーガロイヤルホテルで小出楢重の油彩画《周秋蘭立像》を見てから宮本輝「泥の河」ゆかりの端建蔵橋に進んだり、別の日は、大林組の旧本社ビルから中之島公園剣先の噴水へと足を運ぶなど、中之島の東と西の先端の状況も確認した。日本銀行大阪支店も、同行が開いている見学ツアーで拝見することができた。

本文にある私の鉛筆デッサン、1975年作。真っ黒である。

御堂筋に偉容を誇り、大阪の“シビックセンター”（都市機能が集中した地域）である中之島を象徴する日銀大阪支店に、私は思い出がある。芸大受験のデッサンを習いに通っていた高校時代、夏休みの宿題が大阪市中央公会堂と日本銀行を鉛筆デッサンすることであった。建物のデッサンをする前には、構造を理解するために建物に入り、柱がどう配置されて天井や屋根を支えているか観察しろと指導された。

1975年の暑い日である。麦わら帽子にイーゼルと画板をかかえた汗だくの高校生が、きょろきょろ、日銀の正面玄関から入ってきたことに警備員さんは驚いたに違いない。「内部の構造を確認しろと言われました」と無邪気に答えた私に、ドームの下あたりの天井などを見上げさせてくれた。今回が日銀大阪支店に入る二回目となる。

日本銀行大阪支店は、明治15（1882）年に旧東区今橋5丁目（現・中央区）に開設された。昨年はその140年目にあたる。明治17（1884）年、現在の三井住友銀行大阪本店のある中央区北浜に移り、明治36（1903）年に、かつて水戸藩や島原藩の蔵屋敷があった現在地に、辰野金吾の設計による店舗を建設した。辰野は東京駅、大阪市中央公会堂で知られる建築家である。

現在の建物は、昭和57（1982）年に竣工した新館と、保存・復元工事がなされた旧館とで成る。館内の見学ツアーでは、明治の建築らしい旧館の豪華な旧・貴賓室や階段で時代の空気を深呼吸できたほか、贋札防止技術の説明や、1億円分の紙幣の重さを体験したり、来年度、渋沢栄一、津田梅子、北里柴三郎の肖像に変わる新紙幣の見本も見せていただいた。大阪城からも目印として望まれた中庭の巨木も印象的である。

インターネットで申し込めば誰でも建物内を見学することができる。帰り際、「東京の本店も見学してみてください」と案内の方に勧められた。ぜひとも行ってみたい。

こんな調子の授業だが、レポートである文化芸術案内地図について、学生諸君から“道ぶら”（道頓堀）、“心ぶら”（心斎橋）のむこうをはり、近代大阪風にアレンジして地図のタイトルも中之島をぶらつく「中ぶらマップ」はどうですか、という提案が出た。

こころのうちで、「なかなか面白いことを言いおるわい」とつぶやいた私だが、「中ぶらりん、で終わらんといてな」と、念のために返答しておきました。

※日本銀行大阪支店の見学は、同店ホームページからお申し込み下さい。
日本銀行大阪支店見学予約サイト（https://bojosaka-tour.revn.jp/）

筆者プロフィール

**橋爪 節也**　はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』（創元社）など。